

展覧会のお知らせ

■常設展示

「小川原脩のラダック」

1983年、小川原はインド北部・西チベットのラダック地方を旅しました。空と大地、人々の信仰に生きる素朴な暮らし。そこで出会った光景は、その後の創作に大きな影響を与えました。本展では、ラダック旅行以降の作品を中心にご紹介します。

会期：開催中～10月16日（日）

■企画展示

「第58回麓彩会展」

1958年、小川原脩をはじめとする8人の発起人により創設された「麓彩会」。58回目を迎える本展では、北海道における美術の現況をもうかがい知ることのできる展覧会として、地域にゆかりが深く、かつ道内画壇を代表する作家13人の作品を小川原脩作品とともにご紹介します。

会期：9月3日（土）～10月16日（日）

【関連イベント】

・麓彩会アーティスト・トーク

出品作家が自身の作品についてお話しします。

日時：①9月3日（土）10時～11時30分

②9月10日（土）14時～15時

観覧料がかかります。申し込み不要、直接美術館へお越しください。

アート・イベントのお知らせ

■ロビー・コンサート

川井善晴クラシックギター・コンサート

「組曲・アジアの大地」

日時：9月17日（土）14時～15時 会場：当館ロビー／無料

■土曜サロン

「小川原脩とアンフォルメル（非定形絵画）」

日時：9月24日（土）14時～15時

講師：柴 勤（当館館長） 会場：当館映像ルーム 聴講無料

■造形活動ワークショップ

「むつ先生と絵あそびしよう！②たのしい町になあれ！」

札幌在住の美術家・宮崎むつさんが、楽しい絵あそびを教えてください。人気のワークショップです。

日時：10月1日（土）10時～15時30分

（参加無料・申し込み不要）

※時間内にいつでも参加できます。



第1回のワークショップの様子
（7月30日開催）



小川原脩記念美術館 倶知安風土館

☎ 21-4141

☎ 22-6631

開館時間は9時～17時

（入館は16時30分）

9月の休館日

1日、2日、6日、13日、20日、27日

美術館から

今、釧路にきています。かつて、ここにある美術館で4年間ほど仕事をしていました。海の入り口に位置する建物周辺は抜群の景観、夏場の美術館は多くの市民、観光客で賑わいます。一方、時に零下20度を越える厳しい冬期間には、館内に閑古鳥が鳴くこともしばしば。そこで始めたのが美術の連続講座。すると、毎週、100人近くの市民がこの講座へ足を運ぶことになりました。そう、これが現在当館で開催している「土曜サロン」の原型です。その講座は通年となり、さらに大人向け、こども向けのワークショップも加わりました。市民が楽しむ美術館をモットーに、試行錯誤を繰り返していた当手を懐かしく思い出しています。

館長 柴 勤

海と山と田園とーミュージアムロード情報ー

【クローズアップ】木田金次郎美術館

「木田金次郎の＜肖像＞」展

現在でも確認されている作品が10点に満たない木田が描いた＜肖像画＞。近年相次いで発見されている木田を写した＜肖像写真＞。ふたつの「肖像（ポートレート）」から、木田が生きた時代背景を探る試みです。

会期：開催中～11月6日（日）

■木田金次郎美術館

☎ 0135-63-2221

■西村計雄記念美術館

☎ 0135-71-2525

■有島記念館

☎ 0136-44-3245

■荒井記念美術館

☎ 0135-63-1111

感動一点 の場

『礼拝』

1982 年 小川原 脩 画



初秋の彩りを見せる季節に開催される麓彩会展。1958年に小川原脩、野本醇、穂井田日出麿らがはじめ、年に一度俱知安町公民館に作品を持ち寄り、展覧会を開いてきた。2000年からは小川原脩記念美術館が会場となった。俱知安、羊蹄山麓、そして後志に地縁のある作家たちが、おのおのの創作をひたすら追い求める姿勢を貫いている。

この縦22.0㍍、横27.3㍍という小振りな作品には、チベットの装束を着た女性がひとり、道端の石に腰を下ろし、手を合わせる姿が描かれている。素朴な色づかいは、祈りを捧げる小さな空間に、柔らかな空気を漂わせている。小川原脩は1981年、初めてのチベット行の帰路において、「清澄であること」にしみじみと思い至ったという。翌82年の2度目の訪問以降も、チベットで見た人々の信仰に生きる姿は小川原の主題のひとつとなり、描き続けた。

今年で58回となる歴史を積み重ねながら描き続ける作家たちの展覧会で、この小さいながらも存在感がある作品をとらにご覧いただきたい。

文：沼田 絵美（小川原脩記念美術館 学芸員）

—季節を知る—

空気が澄み、とても過ごしやすくなった。夜にもなると、快い空気を伝えてさまざまな虫の声が届く。いわゆる「鳴く虫」の声がこの季節に目立つのは、繁殖を迎えた種が多いからだ。鳴く虫たちの奏でる「音楽」は、オスがメスに求愛するセレナーデなのである。

これらの虫たちは「日長」を目安に季節を予知している。昼間の長さが彼岸を境に夏至に向けて長く、夏至以降は冬に向けて短くなるように、その変化の進み具合は一年を通して規則的である。その「日長」を使って初秋に繁殖期を迎えるように一年の生活を調整しているのだ。そして我々は、周囲に満ちる虫たちのラブソングから夏から秋へという季節の移り変わりを強く感ずるのである。

日本人には「鳴く虫」の「声」を楽しむ習慣がある。江戸時代の武家の趣味から発したこの楽しみは、今でも季節になるとペットショップでスズムシやコオロギが売られていることから、今に伝わる伝統文化と言えるだろう。鳴く虫の中でもその声が最も耳に快いのはカンタンで、鳴く虫の女王（メスは鳴かないのに・・・）と呼ばれている。飼育が難しいことでも有名で、この虫の美声を聴くためのツアーを東京の旅行社が毎年長野まで繰り出しているともきく。

幸いなことに、この地域では庭先や路傍の草やぶにたくさんいるから、わざわざ飼育しなくても、そしてツアーに参加しなくても、窓を開け放ちさえすればカンタンの囁きかけるような調べが室内に流れ込んでくる。借景ならぬ「借音」とでも言えようか。本州で生まれ育った一人の人間が、今ここにいて良かったと感じる季節の一コマである。

文：岡崎 毅（俱知安風土館館長）

ふる探訪 さと

402 回

